



No.218

【研究主題】

社会の在り方や自らの生き方を追求する子どもの育成
～社会的な見方・考え方を働かせ、「問い」を紡ぐ社会科学習を通して～〈第1年次〉

- 夏期研 本部提案
 - ・ 実践提案 (小学校)
 - ・ 実践提案 (中学校)

【小学校実践事例】

- 1 研究テーマ 「6次産業化・ブランド化から水産業の未来を考える」
- 2 単元名 第5学年「わたしたちの生活と食料生産 ～水産業のさかんな地域～」
- 3 本単元で目指す子どもの姿

- 日本や地域の水産業の課題を捉え、自ら問いや予想を立て、主体的に問題解決しようとしながら、日本の水産業の工夫や努力について調べたり、水産業に関わる人々の思いや願いに触れたりすることで、人々の協力関係や、水産業に関わる人々が食料生産を支えていることを理解している。
- 日本の水産業に関わる人々の工夫や努力について追求してきた成果を生かし、6次産業化やブランド化が担うこれからの日本の水産業について話し合うことを通して、今の日本の水産業が抱える諸課題やその解決に向けた取組を自分ごととして考え、今後の水産業の発展について考えを深めようとしている。

4 教材開発・単元構成の工夫

(1) 教材開発（地域素材とゲストティーチャーの活用）

本実践では、6次産業化やブランド化を営んでいる本県のK水産を教材化した。K水産は、日本における水産業の代表的なまちと同じように、日本の水産業が抱える課題と向き合いながら策を講じ続けており、現在も県内で先進的に6次産業化やブランド化に取り組んでいる水産業者である。そのようなK水産を教材化することで、子どもたちは日本の水産業という本単元で扱う社会的事象をより身近に感じながら、日本の水産業の現状や課題、そしてその解決策について切実な問いを持つことができるのではないかと考えた。

また、単元の中でゲストティーチャー（以下G T）を4人招き、日本や本県の水産業の現状や課題に対する生の声を直接子どもに届けてもらうように試みた。現役の漁師であるAさん、漁業協同組合の担い手対策課のBさんとCさん、県内で6次産業化を営むDさんと共に、日本や本県の水産業の現状や課題を共有したり、追求の中で生まれた新たな問いについて共に悩んだりすることができるように、事前に明確な意図をG Tに伝え、連携を図った。このように地域素材やG Tを効果的に活用することで、子どもたちに多様な問いを持たせ、問いを紡ぎながら、今後の水産業の発展について多角的に考えられるようにした。

(2) 単元構成の工夫

本実践では、前小単元「米づくりのさかんな地域」とのつながりを意識して、そこで働かせた社会的な見方・考え方を子どもが生かせるように、社会的事象との出会いの場面から、日本が抱える水産業の現状や課題を取り上げた。その際、G Tからの生の声を聞くことで、子どもが日本全体と本県を比較しながら、社会的事象を身近に感じ、水産業の現状や課題解決に向けた取組に対する追求意欲を高めることができるようにしたいと考えた。

また、「練り合い高め合い」の場面では、「日本の水産業が抱える課題は、解決に向かっているといえるだろうか」と問い、これまで学習してきたことを基に議論する時間を設けた。ここでもG Tを効果的に活用することで、子どもを実社会とつなげ、今後の水産業の発展について思考を促す「新たな問い」を持たせたいと考えた。そのような子どもの意識の流れを大切にしながら、6次産業化やブランド化に取り組むG Tと出合わせ、新たな学習問題を追求し、水産業の未来を多角的に考えさせる場面を設けた。

このように単元を構成する中で、課題と向き合いながら工夫や努力を続けている水産業に関わる人々の姿を自分ごととして捉え、社会の在り方や自らの生き方を追求しようとする子どもを育成したいと考えた。

単元の流れ（全 13 時間）

過程	具体的な学習の流れと内容				評価規準 【観点】										
	学習問題	教師の問い掛け 追求内容	予想される 子どもの反応	まとめ 本質的把握	資料 教師の働き掛け										
社会的事象との 出会い (1)	<div>日本の水産業はどのような様子なのだろう。</div> <div><div>・売られている水産物の写真 ・主な漁港の水揚げ量</div><div>・水産物の消費量のグラフ ・漁業生産額のグラフ</div></div> <div>・日本は世界的に見ても、魚や貝の消費量は多いね。 ・寒流と暖流がぶつかるところに水揚げ量の多い漁港があるね。 ・愛媛県も漁業生産額が多いね。水揚げ量が多いわけではないのにどうしてだろう。</div> <div><div>日本や愛媛県の水産業の実態や 課題など</div><div>GT (Aさん・Bさん・Cさん) 実態との出会い・課題の共有</div></div> <div>・とれた魚があつという間に消費者のもとに運ばれているんだね。 ・愛媛県では、特に「とる漁業」の生産量が大きく減っているね。 ・Bさんが言っているように、愛媛県での漁業従事者が大きく減っているね。 ・日本全体で見ても、愛媛県と同じような状況なんだね。 ・Aさんは妻くお金を稼げると言っていたけれど、何で人が増えないのかな。 ・課題を解決するには、どうすればいいんだろう。</div>				・日本の水産業について、資料を基に自ら問いを見いだしている。 【思・判・表】										
学習問題の 設定 (1) 評価場面①	<div>日本の水産業が抱える課題は、 だが、どのように解決しようとしているのだろう。</div> <div>・魚をとってから私たちに届くまでには多くの人が関わっているはずだね。 ・漁師さんたちは、少ない人数でも簡単にできるように、機械を使っているのかな。 ・魚を届ける人たちにも、何か工夫があるのかな。 ・米づくりのときの営農指導員のような人がいて、支えているんじゃないのかな。</div>				・日本の水産業の様子について予想や学習計画を立て、主体的に解決の見通しを持とうとしている。 【態】										
予想設定 学習計画の立案 (1)	<div>水産物が私たちに届くまでに、 だが、どのようなことをしているのだろう。</div> <table><tr><th>とる漁業</th><th>育てる漁業</th><th>輸送</th></tr><tr><td>・魚によって釣り方が違うね。 ・人が少ないという課題を、機械を活用することで解決しようとしているね。</td><td>・安定して魚を届けるためにも、つくり育てる漁業は大切なんだね。 ・漁獲量が減ってしまうという課題を、つくり育てることで解決しようとしているね。</td><td>・保冷機能がついているトラックがあるんだね。 ・魚の価格には様々な費用が入っているんだね。 ・新鮮なうちに売ること、魚の価格が上がって漁師さんも喜ぶね。</td></tr></table> <table><tr><th>水産加工</th><th>支える人</th></tr><tr><td>・新鮮なうちに加工するためにも、漁港の近くに工場があるんだね。 ・水産加工品には、蒲鉾やかつお節など、いろいろあるんだね。 ・様々な方法で加工して販売することで、消費者の願いに応えているね。</td><td>・市役所の人たちが魚の住処をつくる活動を行っていたね。 ・漁協の人たちが、新しく漁師を目指す人のサポートをしていたよ。 ・魚の放流や環境の保全など、様々な仕事で漁師を支えているんだね。</td></tr></table> <div>調べて分かったことを、報告しよう。</div> <div>・1つ1つの仕事が合わさって、私たちのもとに届いているんだね。 ・水産業に携わっている人たちは、いろいろな工夫をしていたね。 ・愛媛県や松山市でも、水産業の代表的なまちと同じようなことをしているね。 ・交流してみると、改めて人手不足だということが分かったよ。大丈夫かな。 ・結局、Aさんたちが言っていた課題って解決に向かっていくのかな。</div>				とる漁業	育てる漁業	輸送	・魚によって釣り方が違うね。 ・人が少ないという課題を、機械を活用することで解決しようとしているね。	・安定して魚を届けるためにも、つくり育てる漁業は大切なんだね。 ・漁獲量が減ってしまうという課題を、つくり育てることで解決しようとしているね。	・保冷機能がついているトラックがあるんだね。 ・魚の価格には様々な費用が入っているんだね。 ・新鮮なうちに売ること、魚の価格が上がって漁師さんも喜ぶね。	水産加工	支える人	・新鮮なうちに加工するためにも、漁港の近くに工場があるんだね。 ・水産加工品には、蒲鉾やかつお節など、いろいろあるんだね。 ・様々な方法で加工して販売することで、消費者の願いに応えているね。	・市役所の人たちが魚の住処をつくる活動を行っていたね。 ・漁協の人たちが、新しく漁師を目指す人のサポートをしていたよ。 ・魚の放流や環境の保全など、様々な仕事で漁師を支えているんだね。	
とる漁業	育てる漁業	輸送													
・魚によって釣り方が違うね。 ・人が少ないという課題を、機械を活用することで解決しようとしているね。	・安定して魚を届けるためにも、つくり育てる漁業は大切なんだね。 ・漁獲量が減ってしまうという課題を、つくり育てることで解決しようとしているね。	・保冷機能がついているトラックがあるんだね。 ・魚の価格には様々な費用が入っているんだね。 ・新鮮なうちに売ること、魚の価格が上がって漁師さんも喜ぶね。													
水産加工	支える人														
・新鮮なうちに加工するためにも、漁港の近くに工場があるんだね。 ・水産加工品には、蒲鉾やかつお節など、いろいろあるんだね。 ・様々な方法で加工して販売することで、消費者の願いに応えているね。	・市役所の人たちが魚の住処をつくる活動を行っていたね。 ・漁協の人たちが、新しく漁師を目指す人のサポートをしていたよ。 ・魚の放流や環境の保全など、様々な仕事で漁師を支えているんだね。														
個や小集団の 追求 I (5)	<div>日本の水産業が抱える課題は、解決に向かっていくといえるだろうか。</div>				・日本の水産業について、現在抱える課題と関連付けながら、必要な情報を集め、タブレットなどにまとめ、理解している。 【知・技】										
学級集団での 練り合い高め 合い I (0.5)															

本質的把握Ⅰ
(0.5)
評価場面②

新たな学習問題の設定
(1)

個や小集団の追求Ⅱ
(2)

学級集団での練り合い高め合いⅡ
(0.5)

本質的把握Ⅱ
(0.5)
評価場面③

・1つ1つの工夫が、水産物を私たちに届けることに繋がっているね。
・関わっている人々の努力のおかげで、新鮮な魚を食べられるんだね。
・遠いところに住んでいても、加工することで美味しく食べられるね。
・でも、これで漁師が増えるのかと言われると、増えていないよね。
・課題を解決しようとしているけれど、解決しているとはいえないかな。

GT (Aさん・Bさん)

日本が抱える水産業の課題は、漁師や市場の人、輸送業者など、いろいろな人々が真剣に向き合いながら、工夫や努力をして解決しようとしている。そうした働きによって、私たちの食生活は支えられている。しかしながら、生産量や従事者などの課題は、まだ解決しているとはいえない。

・日本の水産業に携わる人たちは様々な工夫や努力をしていたね。
・でも、Aさんは解決には向かっていないって言っていたよね。
・Aさんは「まだまだ努力が足りない」と言っていたけれど何ができるのだろう。

現在も課題を抱えている日本の水産業では、これからどのようなことが求められるのだろう。

・米づくりのときのように、何か新しい取組をしているんじゃないかな。
・消費者にとってメリットがたくさんあることが求められるのではないかな。

6次産業化・ブランド化の写真
(漁・加工・販売など)

GT (Dさん)
(6次産業化・ブランド化の話)

・今までの学習と違って、1つの会社が全部の流れをやっているよ。
・何で1つの会社で全てを行っているのだろう。そのよさは何なのかな。
・ブランド化することのメリットは何があるのか、詳しく調べたいな。

6次産業化やブランド化は、一体どのようなものだろう。

6次産業化	ブランド化
<div>・生産から販売をまとめているね。 ・間に人をはさまない分、安くなるね。 ・だれにでもできるわけではないね。 ・分からないことも多いね。</div>	<div>・特別な名前を付けて、他の商品と区別しているね。 ・給食で「みかん鯛」が紹介されていたよ。 ・もう少し分かりやすく知りたいな。</div>

GT (Dさん)

・生産者にも消費者にもいろいろなメリットがあるということが分かったね。
・これから、6次産業化やブランド化も含めて、水産業はどうなっていくのかな。

水産業のこれからの発展に向けて、大切なことは何だろう。

	従来の漁業の視点	6次産業化など新しい取組の視点
生産者	<div>・機械化して、生産性を上げることも大切だよ。 ・栽培漁業を行って、収入を安定させることもできるかもしれないね。 ・今まで行っていた工夫を、さらによりよいものにしていくことが必要だね。</div>	<div>・ブランド化を進めて、今よりも多くの消費者に知ってもらうことが大切だね。 ・費用面も含めて、6次産業化が広まれば消費者にもよさを伝えられるね。 ・今まで行っていた工夫を取り入れ、さらによりよいものにしていく必要があるね。</div>
消費者	<div>・漁業のことについて、もっと消費者が知り、消費を増やすことが大切だね。</div>	<div>・消費者側が、漁業や6次産業化のことについて、理解することが大切だね。 ・自分たちが伝えていくこともできるね。</div>

GT (Bさん)
(子どもの発言の価値付け)

GT (Dさん)
(子どもの発言の価値付け)

日本の水産業には様々な課題があり、それを解決する1つの方法として6次産業化やブランド化が挙げられる。それらに携わっている人たちも、現状の課題とも向き合いながら、私たちに水産物を届けるために工夫や努力を重ねている。こうした課題を踏まえ、私たちはこれからも日本の水産業の未来について考え続ける必要がある。

・水産業の生産の工程、人々の協力関係、輸送、価格や費用などに着目して、人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現している。

【思・判・表】

・日本の水産業の様子について、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を解決しようとしている。

【態】

・6次産業化やブランド化について、必要な情報を集めて調べ、ノートなどにまとめている。

【知・技】

・それぞれの取組の利点や課題を踏まえ、関わる人々の思いや願いを関連付けながら、これからの水産業の在り方について考え、表現している。

【思・判・表】

・学習したことを基に、消費者や生産者の立場などから、今後の水産業の発展について考えようとしている。

【態】

5 学習指導方法の工夫

(1) 前小単元を生かした、子どもに問いを持たせるためのG Tの活用の工夫

社会的事象との出会いの場面では、子どもたちの「考えたい」「解決したい」という追求意欲に支えられた学習問題を設定することが重要である。そのため、前小単元の学びを生かし、水産業が抱える課題に焦点を当てて単元を貫く問いを持たせようとした。

そこで、現役の漁師であるAさん、漁業協同組合のBさん、CさんをG Tとして招き、愛媛県や日本の水産業の実態や課題について話を伺った（資料1）。Aさんからは、漁師の1日の働き方について話を聞く中で、漁師の仕事の大変さや、魚が消費者に届くまでに多くの人が関わっていることについて知ることができた。Bさん、Cさんからは、愛媛の水産業が抱える課題（従事者や生産量の減少）が日本の水産業が抱える課題とつながっていることについて話を伺った。子どもたちは、「とれた魚があつという間に消費者のもとに届けられていて驚いた」「漁師の仕事って朝が早くてびっくりした」など、驚きを感じるとともに、「日本の水産業が抱える課題は、農業が抱えていたものと似ている」「たくさんお金を稼げるのに、人が増えていないのはなぜだろう」「課題を解決するにはどうすればいいのだろう」といった課題意識を抱いた。また、G Tの方たちの「水産業が抱える課題については自分たちも困っている」「一緒に考えてほしい」という思いを受け、魚が消費者に届くまでの間に関わる人たちに焦点を当てながら、「日本の水産業が抱える課題は、だれが、どのように解決しようとしているのだろう」という学習問題を設定した（資料2）。

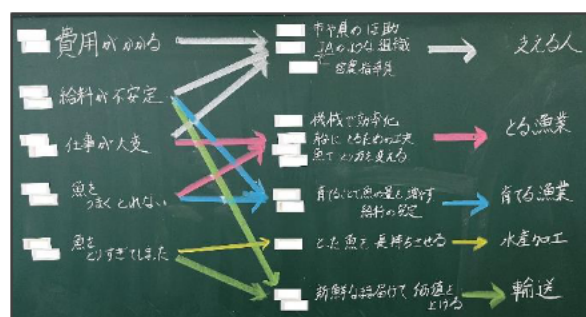


資料1 社会的な事象との出会い

- ・漁師さんと漁業協同組合の人が来てくれました。話を聞いてみると、米づくりのときの農家さんが減っているように、漁師さんもだんだん減っていました。解決方法は違うと思うけれど、似ている部分もあると思います。
- ・米づくりのときのように、漁師さんを支える人たちがいたり、機械はなくても網を大きくしたりするなどの工夫をしていると思うので、これから調べていきたいです。

資料2 社会科日記（第1・2時）

その後、改めて水産業の課題の原因を話し合う中で、「仕事が大変だから」「魚をとりすぎたから」「給料が安定しないから」などの考えが出てきた。その上で、「その課題を解決するためにどんなことをしているのだろう」と問うと、「魚をとる機械で効率化していると思う」「大きくなるまで育てていると思う」「漁師を支えている人たちがいると思う」などの多様な意見が出た（資料



資料3 学習の見通しの持たせ方

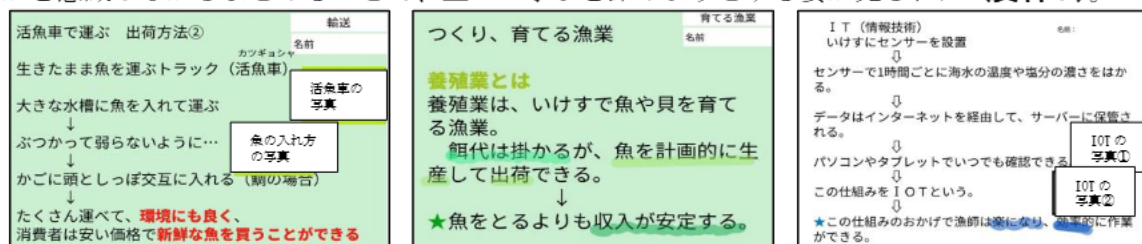
3)。そこで、子どもたちから出てきた意見を基に「とる漁業」「育てる漁業」「輸送」「水産加工」「支える人」の5つの視点にグループ分けを行い、子どもたちがそれらの視点をグループで分担し、追求活動を行うようにした。子どもたちの予想を生かした学習計画を立てたことで、子どもたちは学習問題に対する追求の見通しを持ち、意欲を高めていた（資料4）。

- ・届け方については、魚を運ぶ間に新鮮さを保つために何かやっているんじゃないかなと思います。
- ・加工は手作業だと思うけれど、手作業でできないところを機械で行って生産性を上げていると思います。
- ・育てる漁業では、よりよい魚ができるように餌の開発をしていると思います。愛媛県の漁獲量は減っているけれど、生産額は全国3位なので、育てる漁業をして魚をとる量を増やしていると思うので、それも調べたいです。

資料4 社会科日記（第3時）

(2) 社会的事象の特色や意味を多角的に思考させるための工夫

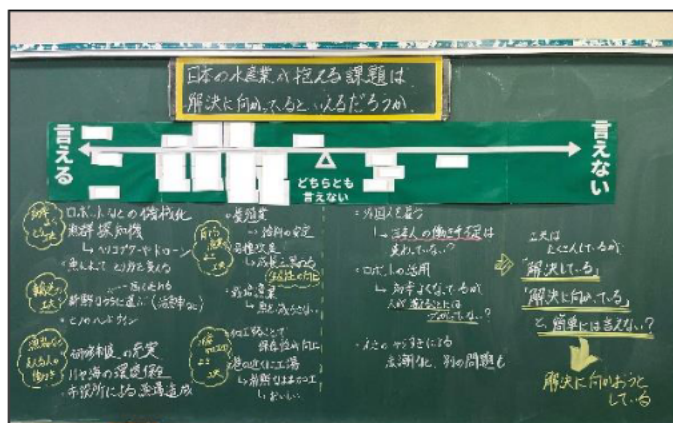
子どもたちは、個や小集団で学習を進めていく中で、水産業が抱える課題と関連付けながら、水産業の生産の工程、人々の協力関係、輸送、価格や費用などについて理解し、関心を高めていった。報告会の資料作りでは、それぞれの場面における工夫がどのようにして課題解決につながっているかを意識しながらまとめることで、互いの学びを深めようとする姿が見られた（資料5）。



資料5 報告会資料作り

子どもたちは報告会を行う中で、「機械化をして効率よく魚をとっていた」「魚によってとる方法を変える工夫をしていた」「新鮮で安全な魚を食べられるように工夫していた」「水産業の課題を解決しようと努力をしていた」など、水産業に関わる人々が工夫や努力を重ねていることについての理解が深まっている様子が見られた。その中で、改めて単元を貫く学習問題に立ち返り、「結局のところ水産業の課題は解決しているのかな」と揺さぶりをかける発問を行った。子どもたちからは、「これだけ効率化しているから解決していると思う」「人手が不足している場面もあったから、まだ解決しているとはいえないのではないか」などの意見が出た。そこで、練り合い高め合いIの場面において、「日本の水産業が抱える課題は、解決に向かっているといえるだろうか」をテーマに話し合わせた（資料6）。

多くの子どもたちは、機械化や研修制度、養殖や品種改良などの今まで追求してきた成果を基に、「解決に向かっているといえる」という立場で話し合いを進めていた。しかしながら、漁業従事者について「工夫はされているが、漁師が減っている」という現状に変わりはない」という意見が出始めると、「それでもいずれは増えるのではないか」「工夫がずっと続いている」ということだから、解決に向かっているとはいいいくいのではないか」など、意見は対立しながら話し合いが進んでいった。子どもたちの話し合いでは、「解決に向かっているとはいえないが、向かおうとはしている」という着地点となった。



資料6 話し合いの様子

授業の終末では、GTのAさん・Bさんからも話をいただいた（資料7）。Aさんからは、「漁師の工夫や努力、頑張りが足りないから、課題の解決に向かっているとはいえない」という意見をいただいた。子どもたちは、現役の漁師からの率直な意見に驚くとともに、「どんな工夫があるのだろう」「まだ頑張りが足りないのか」との疑問や戸惑いを感じていた。一方でBさんからは、「解決に向かっている」というお話をいただいた。さらに、「子どもたちも含めた一人一人が水産業の課



資料7 GTの話の様子

題を知り、何ができるかを考えていくことが大切であること」「消費者が魚を食べることが課題の解決にもつながっていくこと」について語っていただいた。

子どもたちは、G Tとの関わりを通して思いに触れ、改めて水産業に関わる人々の工夫や努力について考えを深めていた。また、生産者の立場で追求活動を行ってきた子どもたちに、自分たちも含めた「消費者」という新たな視点を与えたことで、水産業の抱える課題を多角的に捉え直す必要性を感じさせ、今後の水産業の発展についての関心を高めさせることができた（資料8）。

- ・人が少ないという課題では、機械化されていることからより効率よく仕事が進められるようになっていて、その効率のよさが増えることで労働時間も短くなるから、「働きやすさ」は改善されていると感じました。
- ・水産業の課題は、数々の工夫がつながりながら解決に近づいていることが分かりました。また、水産業に関わる人たちが水産業を共に支え合っていることを知ることができました。
- ・工夫はできていたけど、まだ解決はできていないと思うのでもう少し調べたいです。もし授業が続くなら、漁業協同組合の人が言っていたように消費者について調べたいです。

資料8 社会科日記（第9時）

(3) これまでの学びを生かし、これからの社会の在り方を考えさせるための工夫

子どもたちからは、これまでの学習を振り返りながら「もっと他の努力をしている人はいないのだろうか」「消費者についてももう少し調べたい」などの思いを抱いている様子が伺えた（資料9）。

- ・水産業の課題を解決しているのは、漁師さんだけでなく水産業に関わる人たちだと思っていましたが、学習を通して「消費者」の存在の大切さに気付きました。消費者のことも調べてみたいです。
- ・Aさんが「努力が足りない」と言っていたけれど、どんな努力をすればいいのだろうと思いました。
- ・いろいろな工夫をして課題を解決しようとしていることが分かりました。……でも、まだまだ解決しなければならぬ課題はたくさんあると思うので、もう少し調べてみたいです。

資料9 社会科日記（学習全体の振り返り）

そこで、こうした問いを生かし、「現在も課題を抱えている日本の水産業では、これからどのようなことが求められるのだろう」という新たな学習問題を設定した。子どもたちからは前小単元である「米づくりのさかんな地域」や今まで学習してきたことを基に、「もっと新しい工夫があるのではないか」「より新鮮な魚を消費者に届けて食べてもらうことが大切なのではないか」などの意見が出た。そこで、子どもたちが住んでいる愛媛県にも、今まで出会ってきたG Tとは異なった方法で水産業を営む水産業者がいることを伝え、K水産を紹介した。県内で6次産業化やブランド化に取り組むG Tとの出会い（資料10）によって、子どもたちはそれまで追求してきた成果とは全く異なる取り組みを知って驚くとともに、新たな追求課題に強い関心を抱いていた（資料11）。



資料10 新たなG Tとの出会い

- ・詳しく話してもらえるとワクワクしました。これからも来てほしいと思いました。
- ・6次産業化をなぜやっているのかが気になりました。
- ・シラス漁の社長の話を聞いて、6次産業化やブランド化ということを知りました。社長が6次産業化は生産者よりも消費者が喜ぶと言っていたので、その理由をこれから調べていきたいです。
- ・K水産ではシラスのブランド化をすることで、消費者に名前を覚えてもらっていると聞きました。他にもブランド化することのメリットを調べていきたいです。

資料11 社会科日記（第10時）

その後、「6次産業化」や「ブランド化」とは何かを調べる中で、「どうして今までの水産業同様の流れではないのだろう」「どうしてK水産は1つの会社でまとめているのだろう」「もっと詳しくメリットやデメリットを知りたい」といった意見が見られた。さらに、「実際に6次産業化を行って

いるDさんに詳しく聞いてみたい」という声も多く上がっていたことから、追求過程での疑問を解決するために、Dさんとテレビ会議を行った（資料 12）。子どもたちは、それまでの学習を生かしながら、「6次産業化やブランド化のメリットやデメリット」を話し合ったり、「6次産業化を始める上で大変なこと」「ブランド化の課題」「なぜ6次産業化を行っているか」など、活発に質問したりする姿が見られた。GTや友達との対話を通して、6次産業化やブランド化についての理解を更に深めることができていた（資料 13）。



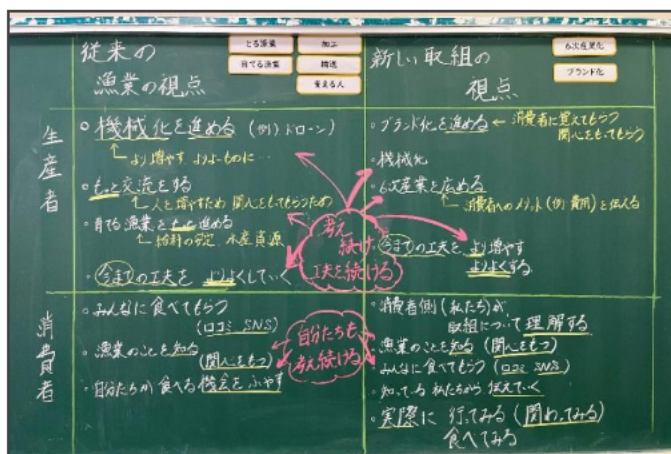
資料 12 GTとの会議

- ・一番驚いたのは、ブランド化にかかる時間です。多くの人に認知してもらうまでに 20 年かかるなんて思っていませんでした。
- ・6次産業化やブランド化にも課題はあるものの、Dさんの「やっていて楽しいから」という言葉が印象に残りました。
- ・消費者にとって「安さ」や「品質のよさ」というメリットがある一方、対応への時間がかかることなどのデメリットも分かりました。
- ・6次産業化もブランド化も、どちらも費用や時間がとてもかかるのは大きな課題の1つだと感じました。

資料 13 社会科日記（第 12 時）

Dさんとのテレビ会議を経て、6次産業化やブランド化についての理解を深めた上で「これからどうなっていくのか」といった問いを抱いた子どもがいた。これまで様々な水産業に関わる方々の工夫や努力を学習してきたからこそ、「これからの水産業はどうなっていくのだろう」「これから大切なことは何なのだろう」と、これからの水産業に対する問いが紡がれることとなった。そこで、「水産業のこれからの発展に向けて大切なことは何だろう」というテーマで、話し合い活動を行った。

GTのBさん、Dさんにも話し合いに参加していただき、子どもたちは、これまで追求してきた成果を根拠に、従来の漁業の視点と新しい取組の視点や、生産者と消費者の視点から多角的に考え、話し合った。すると、「更に機械化を進める」「もっと交流をして関心を高めてもらう」「自分たちが食べる」「実際にその場所に行ってみる」「知っている自分たちが伝えていく」などの意見が出た。そこで、「どの視点においても、共通していることは何だろう」と更なる問いを投げ掛けた。子どもたちは、「もっと」や「よりよく」といった言葉に着目し、どの立場においても、「水産業の発展について考え続けることの大切さ」について気付くことができた（資料 14）。また、学習を通して、これからの水産業の発展に向けて自分の考えをまとめている姿が見られた（資料 15）。



資料 14 練り合い高め合いⅡでの子どもの意見

- ・K水産の話聞いて、水産業の課題はまだまだたくさんあるんだと感じました。課題もあるけれど、ぼくたち消費者に美味しいものを届けようとしてくれているんだということを知ることが大切だと思いました。
- ・私たち消費者は「食べたらいいだけ」と思っていたけれど、水産業に関わっている人たちの工夫や努力を他の人に伝えることも消費量をあげることに繋がると思いました。
- ・Aさんも努力が足りないと言っていたけれど、こうしていろいろな人たちが努力をしていることを知ることができてよかったです。日本の水産業について、これからも関心を持ち続けたいです。

資料 15 社会科日記（第 13 時）

以下に「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、単元計画の評価場面①～③における子どもの記述や考え方の変容を示す。

	A児	B児
評価場面 ①	<p>今日はAさんと、Bさん、Cさんの3名が来てくれました。漁師さんの仕事の大変さや、働く人やとれる魚の量が減っていることを知ることができました。</p> <p>私は、学習問題について、砂浜にあるごみは海に流れると、魚が食べてしまい、その魚を食べる人間の体にもよくないから、砂浜をきれいにする人がいるんじゃないかと思います。</p>	<p>今日はAさんやBさん、Cさんのお話を聞きました。漁師さんの仕事の大変さや魚が私たちのところに届くまでにたくさんの人が関わっていることを知りました。そして学習問題も「日本の水産業が抱える課題は、だれが、どのように解決しようとしているのだろう」に決まりました。</p> <p>私は愛媛県が養殖日本一と勉強したので、魚がとれなくなっている分、たくさん養殖しているのではないかと思います。それなら、たくさんの人が魚をとりに行く必要もないのではないかと思います。</p>
評価場面 ②	<p>学習を通して、水産業に関わる人（加工・とる漁業・育てる漁業・輸送・支える人）たちが色々な工夫をして解決を目指そうとしているということが分かりました。そして、そうした工夫によって私たち消費者の食生活が支えられているのだと分かりました。</p> <p>でも、私は水産業の課題は「解決に向かっていない」寄りの意見です。なぜなら、「解決するための工夫はたくさんあるけれども、本当に漁師は増えるのかといえば増えないんじゃないかな」という思いがどうしてもあるからです。</p>	<p>私は育てる漁業について調べました。育てる漁業では、安心して魚を届けることができ、漁獲量が減ってしまうという課題も解決していると感じました。</p> <p>他のグループの報告でも、輸送方法を工夫したり、漁港の近くで加工したりして生産量を増やしたりしていることが分かり、少ない人数でも解決できるシステムになっていると感じます。</p> <p>私は水産業の課題は解決に向かっていていると思いますが、Aさんはまだ解決していないと言っていました。他の漁業をしている人たちに、何か別の工夫があるのなら、知りたいと思いました。</p>
評価場面 ③	<p>6次産業化もブランド化も、メリットばかりかと思っていましたが、実際にはブランド化にたくさんの時間やお金がかかったり、6次産業化では1つの会社で行う分、消費者への対応に時間がかかったりと、デメリットもあることが分かりました。</p> <p>だからこそ、私はこれからの水産業には、こうした水産業のメリットやデメリットを消費者が理解することや、生産者が今まで以上に工夫や努力を続けることが大切になるのではないかと思います。生産者だけが頑張るのではなく、私たち消費者が「食べる」ことはもちろん、「知る」ことで、これからの水産業がよりよくなるのではないかと思います。</p> <p>そうする中で、水産業の課題も、少しずつ解決に向かうのではないかと思います。</p>	<p>前回、私は「漁業の課題は解決に向かっていている」と書きましたが、やはり解決に向かっていていると思います。それはみんなが「解決するために努力をしている」からです。育てる漁業も天然の魚と同じ品質に近づけるように、えさや育て方を工夫していました。</p> <p>6次産業化のDさんからは、育てて、加工して、販売することを全てまとめて行っていたり、ブランド化を進めて、たくさんの人に自分たちの魚を知ってもらったりしていると教えてもらいました。工夫は違うけれど、おいしい魚をたくさんの人に届けたいという思いは同じだと思います。こうした思いを生産者が持ち続けることや、消費者がその思いに気付くことが、これからの水産業には求められるのではないかと感じました。</p> <p>私は魚があまり好きではなかったけれど、給食などで出た時は、「これはどこ産の魚かな」「どうやって育った魚かな」など、想像しながら食べたいと思います。新聞記事で漁業のことが載っていたら、しっかりと読みたいと思います。</p>

評価場面①では、A児、B児ともに、学習問題に対する自分の予想を立てることができている。A児には「支える人」について、B児には「育てる漁業での工夫」について捉えることができるように朱書きを行った。

評価場面②では、A児は水産業に関わる人々の工夫によって消費者の食生活が支えられていることを捉えているものの、その工夫については「色々」と曖昧な表現になっている。また、学習問題の解決に関しては、「工夫はあるものの漁師が増えるとは思えない」と、自分自身の考えに対して根拠が不足していることが伺える。一方、B児は水産業における工夫や努力を具体的に捉えた上で、G Tの話を踏まえながら、更なる課題解決について意欲を高めていることが伺える。

評価場面③では、A児は、新たな学習問題に対する自分の考えについて、「生産者」と「消費者」の視点を踏まえて、具体的に水産業の今後の発展について表現している。評価場面②と評価場面③での考えの変化に至った理由を、「生産者の努力」だけでなく「消費者の理解の重要性」と認識していることが見受けられる。これらのことから、これまでの学習を踏まえて、これからの水産業の発展に対する考えが、より多角的になっていることが読み取れる。

B児においては、どちらの取組の視点においても、生産者の視点を中心に水産業の発展の在り方が表現されている。また、生産者と消費者のそれぞれの立場から、これからの水産業に求められることについても、学びを基にして考えを表現することができている。これらのことから、G Tとの関わりや学級集団での話し合いを通して、問いを紡ぎ社会的事象に対する思考を広げ深めていることが伺える。さらに、自分を含めた消費者という立場からこれから取りたい行動を考えるなど、社会的事象について主体的に関わっていこうとする態度の醸成が伺える。

7 成果と課題

- 地域素材を教材化したりG Tを効果的に活用したりしたことで、課題と向き合いながら工夫や努力を続けている水産業に関わる人々の思いや願い、そしてその働きについて考えることができた。
- 複数回G Tと関わる中で、問いを解決したり、新たな問いを見いだしたりすることが、社会的事象に対するより深い考察を導くことにつながった。
- ▲ 単元表を活用したことは、子どもに学びを自己調整させたり、自身の変容に気付かせたりすることには有意義であった。その一方で、自己の変容に気付かせることと、本研究の「問いを紡ぐ」こととの関係を明らかにすることには至らなかった。今後は、自己の変容を捉えることと「問いを紡ぐ」ことの関係や、効果的・効率的な評価について模索していきたい。
- ▲ 子どもの主体性が発揮される学びを充実させるために、問いの創出を狙いとしていたが、子どもたちが問いを見いだしたり、深化させたりするには個人差が大きかった。今後は、子ども同士や教師、G T等との対話によって問いを紡ぎ、自らの考えを問い直す場面を充実させたり、本質的把握に迫るための手立てを充実させる中で、自分と社会との関わりについて考えを深めさせたりするなどして、社会の在り方や自らの生き方を追求する子どもの育成を目指していきたい。

【中学校実践事例】

1 研究テーマ 現代社会の諸課題と向き合い、未来社会の在り方や自らの生き方を追求するための学習展開の工夫

2 単元名 第2学年 地理的分野「東北地方 ～『継承』祭りがつなぐ、人の営み・地域の思い～」

3 本単元で目指す生徒の姿

- 東北地方の地域的特色について、自然環境や産業、交通・通信網の発達との関連性や伝統的な生活・文化をどのような思いや願いで継承していったのかなどに着目して、多面的・多角的に考察し、表現している。
- 東北地方について持続可能な地域の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に追求しようとしている。

4 教材開発・単元構成の工夫

(1) 教材開発の工夫

本単元で扱う「祭り」は、全国各地で地域、生活、文化に根差した特徴的なものとして行われている。また、生徒自身も地域の祭りに参加し体験したことがあるため、地域的特色の理解を深める上で「祭り」は、生徒にとって親しみやすい教材になると考えた。本単元の実践前に祭りについてのアンケートを取ったところ、「にぎやかで、非日常的で特別な楽しいイベントである」という意見が多かった。

本単元で扱う東北地方といえば、2011年に東日本大震災により甚大な被害が出た地域である。震災直後の復興もままならない状況で当時の人々が注目したのが「祭り」であった。東北地方の祭りは、全国から多くの観光客を集め、盛大に行われることで有名で、実際に震災後には、「東北六魂祭」が行われている。なぜ地域に大きな被害が出た直後に重要視されたのが「祭り」だったのか。授業前のアンケート結果から、生徒の捉える「祭り」に対する認識と、東北地方の人々の捉える「祭り」に対する認識にはズレがあると考え、それを考察させることで、生徒は地域の伝統的な生活・文化に関する「問い」を見いだし、追求意欲を高めていくことができると考えた。

また、「祭り」の由来や歴史について調査・追求させることで、自然環境や産業、交通などに関連付けて東北地方の地域的特色についても多面的・多角的に考察できると考えた。さらに「人口流出に悩む地域が、祭りなどの伝統的な生活・文化を生かした持続可能な地域づくりをどのように目指していくか」という今日的な課題についても、課題意識を持ち、主体的に追求させたいと考えた。

(2) 単元構成の工夫

これまでの学習を通して、日本の諸地域には、それぞれの地域的特色があることを学んできた。また、各地域が抱えるさまざまな課題とその解決を目指した取組についても繰り返し考察してきた。地理的分野の最終単元である「地域の在り方」では、これまでの学習の中で身に付けた考察の仕方を活用したり、地理的な見方・考え方を働かせたりしながら、持続可能な社会の在り方について考える授業を構想したいと考えている。その中で、今まで気付かなかった地域の魅力を再発見し、積極的に提言できるような展開につなげたい。

そこで、東北地方の地域的特色を日本の諸地域で学んだ五つの視点（①自然環境を中核とした考察の仕方②人口や都市・村落を中核とした考察の仕方③産業を中核とした考察の仕方④交通や通信を中核とした考察の仕方⑤その他の事象を中核とした考察の仕方）を生かして考察させたいと考えたため、本単元を日本の諸地域の最後に位置付けた。そして、本校が位置する今治市では「おんまく」という祭りで地域を盛り上げようとしていたり、校区で行われる野間神社の祭りに中学生が参加したりしているため、地域の伝統的な生活・文化に着目した本単元の学びを次の単元である「地域の在り方」にもつなげていきたいと考えた。

本単元は、大きく2段階で構成した。前半では、東北地方の祭りの由来や歴史を調査・追求す

ることを通して、東北地方の地域的特色について多面的・多角的に考察できるように授業を構成した。後半では、持続可能な東北地方の地域づくりにおける伝統的な生活・文化の継承の在り方について考察することを活動の中心とした。そして、未来社会を見据えて、自分自身が「地域の伝統的な生活・文化を継承するとはどういうことなのか」ということについて考えを深め、広い視野から地域の持続可能性について追求していこうとする態度を育んでいけるように展開を工夫した。

単元の流れ（全7時間）

過 程	具体的な学習の流れと内容	評価規準（方法） 【観点】
	<div> <div>学習問題</div> <div>教師の問い掛け 追求内容</div> <div>予想される 子どもの反応</div> <div>まとめ 本質的把握</div> <div>資料 教師の働き掛け</div> </div>	
社会的事象との出会い (0.2)	<p>東北地方の人々は、なぜ震災直後に「祭り」を選んだのか。</p> <p>東北地方の人の話 東北絆まつり</p> <p>・震災前のように祭を通して元気を出してほしい。 ・祭りで人を集めて、東北地方を盛り上げたかったから。</p>	・祭りの様子から東北地方の人々の復興に懸ける思いや願いに気付く。 【態】
学習問題の設定 (0.3)	<p>東北地方の人々にとって祭りはどのような役割を果たしているのか。</p> <p>・人が集まることで、地域の活性化につながるのではないかな。 ・東北地方の人々にとって、祭りは何か特別な役割があるのではないかな。</p>	・東北地方の人々にとっての祭りの役割はどのようなものか、意欲的に意見を述べようとしている。 【態】
予想設定 学習計画の立案 (0.5)	<p>「東北絆まつり」に参加した各地の祭りの意義を調べよう。</p> <p>【昔】①はじまり ②願い ③参加者 ④特徴 ⑤担い手 【今】①はじまり ②願い ③参加者 ④特徴 ⑤担い手</p> <p>祭りの果たす役割は、昔と今でどのように変化したのか。</p>	
個や小集団での追求Ⅰ (1) ★1	<p>【昔】厳しい自然環境の中で、豊作を祈る役割が大きい。 【今】観光地としての役割が大きい。</p> <p>昔の農業の様子 祭りの運営者の話</p> <p>祭りの役割は「今」と「昔」で大きく変わった。「昔」は自然環境が厳しく、豊作や産業の進展を祈るなどの役割が主だったが、「今」は祭りの観光化が進み、地域の活性化の手段になっている。</p>	・各県の祭りについて、歴史や自然、産業や交通、他地域との関連や関係に気付く、適切に文章にまとめようとしている。 【知・技】
学級集団での練り合い・高め合いⅠ (1) ■1	<p>東北地方の祭りは、産業定着に向けての苦労や、発展を願う人々の思いや願いが込められており、地域の関わりを深めるものであった。現在の祭りは、観光化が進み、他地域とのつながりを作っていく役割へと変化している。このように、東北地方の人々の生活に、祭りは関わりの深いものである。</p> <p>祭りの運営者の話 東北地方の人口の変化を表すグラフ</p> <p>・人口減少によって祭りの存続が難しくなり、地域における人々のつながりも薄れてくるかもしれないね。 ・人口減少が進む中で、これからの祭りはどうなっていくのだろう。</p>	・東北地方の祭りが「今」と「昔」で変化していることを、歴史的背景や観光資源という側面を踏まえて、地域の関わりの視点から考え、自分の言葉で表現している。 【思】
本質的把握Ⅰ (1) 評価場面①	<p>どのように伝統的な生活・文化を継承していけば、持続可能な東北地方を目指すことができるのだろうか。</p> <p>・若い世代が積極的に参加する方法を考えていくことが、持続可能な東北地方につながっていくのではないかな。 ・伝統や文化を継承することだけでなく、その良さや魅力を他地域に発信することで、観光資源として活用していけばいいのではないかな。</p>	
新たな学習問題の設定 (0.5)	<p>持続可能な東北地方を目指すために、祭りなどの伝統や文化をどのように継承、発展させていけばよいのか、その方策を考えよう。</p> <p>東北地方について 現代のニーズに対応した活動とは 東北地方の祭りについて ・HPやSNS等の有効活用 ・東日本大震災から学ぶ</p>	・人口減少の問題を把握した上で、持続可能な地域づくりを目指すために問いの予想をしている。 【思】
個や小集団での追求Ⅱ (1.5) ★2		

<p>学級集団での 練り合い・高 め合いⅡ</p> <p>(0.7) ■ 2</p>	<div data-bbox="337 176 1152 320"> <p><見えてくる様々な背景とは></p> <ul style="list-style-type: none"> ・都市部と山間部では、交通網の発展に大きな差がある。 ・人口流出に歯止めをかけなければならない。(職の確保・生活保障) ・少子高齢社会の実現が、人と人とのつながりの大きな壁となっている。 </div> <div data-bbox="337 342 1152 420"> <p>これらの方策は、伝統を生かした持続可能な地域づくりといえるのだろうか。また、伝統や文化を継承するとはどういうことだろうか。</p> </div> <div data-bbox="337 431 1152 652"> <ul style="list-style-type: none"> ・東北地方の魅力の中に伝統や文化を含めて紹介することは大切だが、時代に合った今までと違う表情の東北地方を発信していかないと、持続可能な地域づくりに向けて伝統や文化の継承は難しいと思う。 ・交通網の発達した場所への偏りは、農村部や山間部などの過疎地域の衰退を一層進めるため、持続可能な地域づくりとは言えない。現代に合った伝統や文化への変容をしていくためにも、「伝統×○○」などの掛け算のように工夫をして広めていくといいのではないかな。 </div> <div data-bbox="337 663 1152 840"> <p>伝統や文化は当時の人々がつくり、絆を強める親しみやすいものだったからこそ、今日まで受け継がれてきた。今までの伝統や文化をこれまでの形で受け継いでいくことが、現在の人々に親しまれるものになるとは限らない。伝統と何かを掛け合わせ、新たな形として作り替えて継承することで、持続可能な地域づくりにつながっていくのではないかと考える。</p> </div> <div data-bbox="744 851 1152 929"> <p>東北地方を訪れる観光客の地域別データ</p> </div> <div data-bbox="337 940 1152 1271"> <p>本来、祭りや伝統行事は、「人と人」、「地域相互」のつながりを作ってきたもので、地域にとって重要で必要不可欠な存在である。特に東北地方においては、祭りや伝統行事によって地域の特色が形作られている。しかし、少子高齢社会の中で、伝統や文化の継承に関する課題が浮き彫りとなってきた。この課題は、持続可能な東北地方の実現を困難にする1つの大きな要因である。伝統的な生活・文化の継承に関して、現代の人々のニーズや社会の変化に柔軟に対応した変化を迫られている。人口減少が進む地域が増えることから、伝統的な生活・文化の在り方を見直し、新たな形で継承するべきである。その一方で、変わらぬ人々の思いや願いも継承していかなければならない。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えに根拠を持って、方策を考えられている。 【思】 ・他者の意見を踏まえて、深い学びへととなり、根拠を持って、文章でまとめている。 【思】 ・東北地方の学習を「日本の諸地域」の学習のまとめと位置付け、地誌学習に粘り強く取り組もうとしている。 【態】
<p>本質的把握Ⅱ</p> <p>(0.3)</p> <p>評価場面②</p>		

5 学習指導方法の工夫・改善

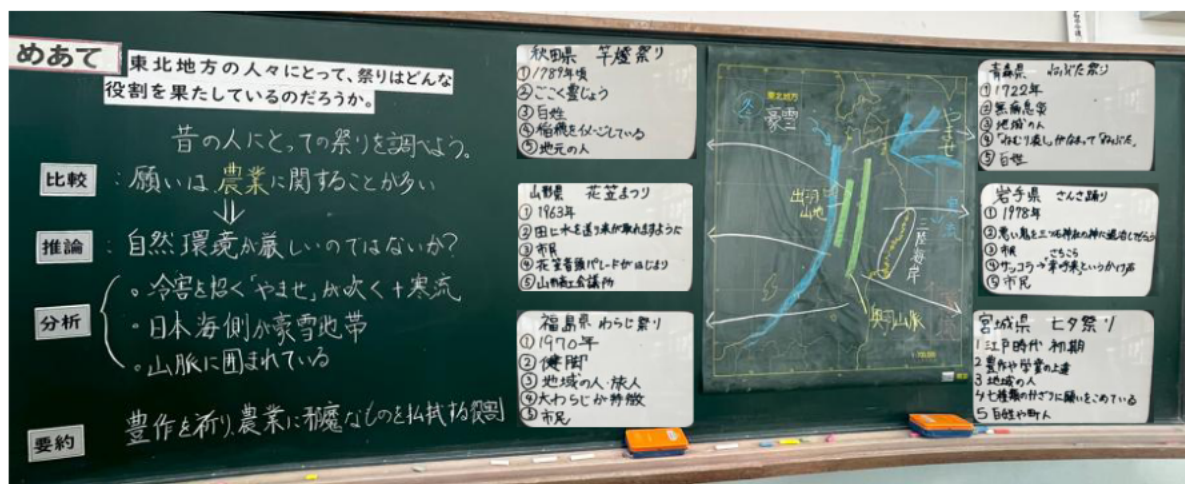
(1) 子どもの認識のずれを生かした学習問題の設定

本単元では、学習問題を「東北地方の人々にとって祭りはどのような役割を果たしているのだろうか」と設定した。東北地方の地域的特色について学んでいく生徒にとって、東日本大震災は避けては通れない事象だといえるため、導入の場面では当時の実際の映像を扱い、興味・関心を広めた。その後、「震災直後の東北地方では復興に向けてどのようなことが行われたのだろうか」という問いを教師が投げ掛けたのだが、生徒からは仮設住宅の設置やインフラ整備など生活の再建に関する意見が多く挙がった。しかし、実際には震災直後の復興もままならない時期に、東北地方の人々が、「例年のように祭りを企画して実施した」という生徒の想定外の事実と直面させることで、生徒と当時の東北地方の人々との認識のずれを生じさせた。このようにして、生徒の疑問に基づきながら学習問題を設定し、その後の追求においては、東北地方の六魂祭の様子や絆まつりを運営する人へのインタビューを資料として用いて授業を進めていった。また、復興のために祭りを選んだ東北地方の人々の思いや行動について理解を深めることを通して、祭りが地域の中で果たす役割について多面的・多角的に捉えていくことができるよう工夫した。

(2) 板書のコーディネート

練り合い高め合いⅠの場面では、東北地方の代表的な祭りの「昔」と「今」を比較させた。まず、各班に祭りを一つずつ割り当て、五つの視点を設定して調べ学習を行わせた。その際の視点は、「はじまり」、「願い」、「参加者」、「特徴」、「担い手」の五つである。生徒は調べた内容をロイ

ロノート上のワークシートにまとめて発表させた。そして、各班の発表を通じて出てきた情報や学級全体での追求成果を黒板（資料 1）の地図のように記入して共有した。「昔の祭り」が東北地方の自然環境や人々の生活・文化とどのように関わって成立したのかを様々な祭りの内容について見比べることができるように板書のレイアウトを工夫（①調べた内容の位置や分布についての情報を一つの地図上に整理すること、②視点ごとの関連やつながりに気付かせるための「問い」を明示したこと）したことで、「祭り」の由来や歴史から見えてくる東北地方の地域的特色を視覚的に理解させることにつなげた。



資料 1 練り合い高め合い I の場面の板書

(3) 地域の持続可能性について、多様な視点から、考察・構想させるための工夫

新たな学習問題の設定の学習活動に入る前に、伝統的な生活・文化の「継承」という新たな学習問題への課題意識を高めるために、「東北地方の伝統的な生活・文化は継承していくべきか」という問いを投げ掛けた。この問いに対して、多くの生徒は「伝統的な生活・文化は継承されていくべきだ」と考えていた。そのことを踏まえて、「持続可能な東北地方を目指すために、祭りなどの伝統や文化をどのように継承、発展させていけばよいのか」という学習問題を追求していくこととした。生徒は、「有名人を呼ぶことで祭りが盛り上がるので、消えていくことはないんじゃないか」や「大都市を中心に祭りをを行うことで、多くのお客さんが来て持続可能な東北地方になっていくのではないか」などの意見が出された。しかし、これらの意見は持続可能な地域としての東北地方について考えていく上で、地域の実態が反映されなかったり、地域の人々の思いや願いと合っていない、どこか他人事な意見になっていたりすると感じた。そこで、本単元（前半）の学びを生かしたり、東北地方の地域的特色を踏まえたりした考察にすると考え、生徒が方策の吟味・検討をする際に意識する視点として三つを提示して議論させた。その三つとは、「妥当性」「実現可能性」「持続可能性」である。この視点を基に互いの班が提案した方策について議論させたことで、自分の意見が地域的特色を踏まえたものや、特色を根拠にした判断がなされているものになった生徒が増えていた。また、岩手県の代表的な伝統的工芸品である「南部鉄器」が時代に合わせて形や生産・販売方法などを変化させているという事例から、地域の伝統的な生活・文化を『継承する』とか『生かしていく』ということには多様な形や方法、考え方があることを見いだす生徒もいた。このような議論を通して、東北地方の地域的特色への理解を深めることはもちろん、伝統的な生活・文化に特色がある地域の持続可能性について構想する上で、どのような考え方をしたり、何が必要なのかを判断したりするための新たな気付きや視野の広がりを促すことができたと言える。

6 評価の工夫

生徒の学習理解を深めるためには、単元の学びの過程で生徒が作成した成果物を見取る際に教師が気付いたことや改善した方がよいと思う点を生徒に効果的にフィードバックすることが大切である。以下では、本単元の二つの評価場面における見取りの際に行った工夫について述べる。

(1) 見取りを活用して生徒の学習理解を深めるための手立ての工夫

単元の流れ図にある**評価場面①**では、東北地方の地域的特色について、多面的・多角的な考察が行われて、それを自分の言葉で表現できているかどうかを見取った。なお、以下の表は**評価場面①**における評価規準である。

評価 規準	東北地方の地域的特色について、自然環境や産業、交通・通信網の発達との関連性や、伝統的な生活・文化をどのような思いや願いで継承していったのかなどに着目して多面的・多角的に考察し、表現している。
----------	---

ある生徒（添付資料⑥）は、伝統的な生活・文化の発達と地域の自然環境や産業などとの関連に着目しながら、東北地方の地域的特色を多面的・多角的に捉えられている。また、追求成果を基に、時代によって変化してきた祭りの役割についても言及することができていることから、「複数の視点からの考察ができていること」、「時代によって変わる人々の営みに着目できていること」を賞賛するコメントを記述し、Aと評価した。一方、他の生徒（添付資料⑦）は、自分が調べた「祭り」の内容についての説明しかできておらず、「祭り」という伝統的な生活・文化が発達した背景や要因の追求を通して、東北地方の地域的特色などを見いだすまでには至っていない。そこで、本単元までに考察の中核とした「自然環境」や「交通・通信」など複数の視点を関連付けて地域を捉えさせるために、添付資料⑧のように、1枚の白地図に追求成果を書き出し、その情報を重ね合わせて読み取らせた。また、定型文を活用し「東北地方の人々にとって祭りは～であった。なぜそう考えたか」というと〇〇だからである。それが現在の祭りは、～である。なぜそのように変化したか」というと、〇〇だからである。」と説明させるようにした。「～」にはキーワードとなる言葉など短い言葉でまとめるようにさせ、「〇〇」のところには、そう考えた根拠を追求成果から説明させることができるようにした。このような手立てを講じたのち、再度自分の言葉でまとめさせると、社会的事象同士の関連性を見付けて、「祭り」の説明ではなく、東北地方の地域的特色を踏まえて、人々の祭りに対する願いの変容について説明することができるようになった。また、級友同士でまとめた内容について対話させることで、生徒同士で自分に不十分な内容やもっと付け加えたらよいと思われる視点を見付けやすくなるようにした。

評価場面②では、伝統的な生活・文化を生かした東北地方の持続可能な地域づくりについて、現在の課題となっていることの解決に向けて、主体的に追求しようとしているかを見取った。なお、以下の表は**評価場面②**における評価規準である。

評価 規準	東北地方について持続可能な地域の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に追求しようとしている。
----------	--

ある生徒（添付資料⑬）は、様々な資料や祭りの運営に携わる人の話から、東北地方の伝統的な生活・文化に対する思いや地域における役割の大きさを実感し、それを阻む「担い手不足」や「固定観念」といった課題について主体的に解決策を考えようとしている。また、「伝統的な生活・文化を『生かす』ということの多様さ（そのまま残す、新たに生み出す、形や方法を柔軟に変えていくなど）に気付いていること」、「東北地方の地域的特色を踏まえた持続可能性について自分なりに表現することができていること」を称賛するコメントを記述し、Aと評価した。一方、他の生徒（添付資料⑭）は、伝統的な生活・文化を生かした地域づくりに向けた方策について、「誰に対して」「何を使って」「どうやって」「それを行うとどうなるか」といった、思考を広げるための問い掛けを行いながら自己の記述を見直させることで、おのずと多面的・多角的な考察が行えるように促した。また、「実現可能性」「妥当性」などに着目して対話を行うことで、東北地方の地域的特色を追求する際に得られた学びを効果的に使ったまとめができるよう工夫した。

このように、教師が成果物などを見取った内容や改善につながると考えられる項目を、適切に生徒にフィードバックすることは、生徒自身の内容の理解を促すことにつながったり、さらに課題意識をもって次の単元の学習に臨もうとする意識を向上させることにつながったりするという点で有効だと考えた。

(2) 自己の学びを調整し、よりよい学習方法を模索しようとする意識を高める評価場面の設定

単元の学習に課題意識を持って取り組み、学びの質を高めようとする生徒を育てるには、生徒自身が自己の学習過程や方法を見直し、よりよい学習を模索しようとする意識を持ったり、よりよい学習が実践できたことを自覚したりすることが大切だと考える。授業を通して生徒自身が自分で学びの質を高めていくことができるように、単元の終末だけでなく、学習のプロセスの中で、複数回において自己評価、相互評価を行い、主体的な学びを促す評価について工夫した。

単元の流れ図にある★1・2の場面では、自己評価の場面を設定した。個や小集団での追求Ⅰでは、東北地方の六大祭りについて、調べ学習の到達度を生徒自身が3段階で評価し、簡単な振り返りを書ける自己評価シート（添付資料②）を作成した。そうすることで、生徒の調べた内容が、単なる調べ学習にとどまらず、祭りの由来について理解した内容や、その内容を比較することで、知識だけでなく祭りの背景や意義について気付かせることができた。また、★2の場面では、よい方策が「できた」か「できなかった」ではなく、「どのように考えたか、どの視点で課題に向き合ったか、どんな気付きがあったか」を振り返ることが重要であると考え、それを振り返ることができるような自己評価シート（添付資料⑪）を用いた。このように自己評価を行うことで、「なぜこの方策にしたのか」や「何を大切にしたいのか」を生徒自身が振り返り、考える力と根拠を持って、説明する力が身に付けたいと考えた。

単元の流れ図の■1・2では相互評価の場面を設定した。■1では、各地の祭りについて調べた後、「祭りの果たす役割は、昔と今でどのように変化したのか。」という問いに対して、各自の考えをまとめた。その後、グループ内で発表を行い、「友達の意見について評価しよう」というシートを用いてコメント式の相互評価を行った（添付資料④）。評価については、「良かったところ」と「もっとよくなるためのアドバイス」という観点から評価した。最初に教師が良い評価の例を示し、どのような所が良いのか具体的に評価するように留意した。相互評価を行うことで、他者の良さを見付けながら自分との違いや、自分の改善点に気付いたり、他者からポジティブな評価をもらうことで、学習意欲の向上につなげたりすることができた。

また、単元の流れ図の■2の場面では、追求成果を用いて、相互評価の場面を設定した（添付資料⑫）。その際、あらかじめ評価の視点を①「妥当性」②「実現可能性」③「持続可能性」の三つから評価した。何を見て評価するのか根拠を明確に示すことが重要となる。そうした視点で相互評価することで、他の生徒の考えを通して、「自分にはなかった視点」や「新しい見方」に気付き、視野や思考が広がるようにした。また、自分の意見がどう受け取られたかを知ることで、表現力の向上にもつなげるようにした。このように、自分の追求に不足している部分を理解して、考えを深めていくことで、その先の本質的把握の内容がより充実したものとなるようにした。

単元の随所で、自己評価、相互評価、フィードバックを行うことで、自分と他者の考えを比べたり、様々な角度から見たることができる。そのような活動を通して、社会的事象の価値判断を、独りよがりの判断から、公正な判断なものにしていくようにした。主体的に学習に取り組む態度の育ちを見取るためには、単元の適切な場面に自己の学習内容や方法について見直す場面を設定することが有効で、その見取りに対する教師のフィードバックも重要な手立てになることが分かった。

7 成果と課題

- 東北地方を地域の伝統的な生活・文化である「祭り」を通して学ぶことや、教科書にない社会問題を取り上げることで、これまでの日本の諸地域の単元学習で学んだ考察の視点を生かしながら、多面的・多角的に課題を捉えることができた。
- 愛媛県から距離のある東北地方について、インターネットで調べるだけでなく、東北地方に住む人の実際の声を聞くことで、切実な思いや課題を知り、生じた疑問を基にその後の学習につなげることができた。
- ▲ 生徒の疑問や考えを深めさせる際に、資料の提示が不十分で効果的な支援ができなかった。
- ▲ 生徒が自分ごととして課題を考えたり、その解決を目指して主体的に追求させようとしたりすることは難しく、教師が授業をコーディネートする工夫を今後も考えていく必要がある。